

2019年度 個人研究実績・成果報告書

2020年 5月 6日

所属・職	人間社会学部・准教授	氏名	佐藤 哲彰
研究課題	ボランティアの継続等要因に関する実証研究 (①) 他		
研究キーワード	介護、長時間労働、離職、シミュレーション、家事・育児	当年度計画に対する達成度	3.概ね順調に研究が進展し、一定の成果を達成したが、一部に遅れ等が発生した
<p>1. 研究成果の概要</p> <p>①ボランティアのインセンティブに関するレビューワークの中で、それぞれの研究で扱われているインセンティブが総花的で、研究相互間が十分噛み合っていないように感じた。これだけボランティアの担い手不足が騒がれているのに、この分野で芳しい研究成果がみられないのは、そのせいではないかと考えた。</p> <p>そこで私は、Pink(2009)の核心命題である、金銭的報酬の格差付けなどいわゆる「アメとムチ原理」が、かえって内発的動機づけを破壊する、との命題の検証を、仮の中心テーマとすることにした。研究者が我が身を振り返れば自明のようにも感じられるこの命題は、実際には任期制導入拡大が学術研究全般に与える影響を思い浮かべればわかるように、身近な学術研究の分野ですら、複雑なように思える。</p> <p>だが、ボランティアでは直接的な金銭報酬の格差付けはほとんどされておらず、ボランティア経験は就職活動ではほとんど重視されないため、間接的にも「アメとムチ」原理は成り立たないようにも思える。</p> <p>そこで今年度は更にレビューワークを進めた。一見利他的に思える行為も、実は拡大自己利益として捉えることが可能であり、経済学の文脈にも叶う。特に、自分や他者から見た「自己像」の維持改善が、人の行動をかなり規定している可能性が指摘されている (Titmuss 1970, Bénabou and Tirole 2003, Ariely et.al 2009 など)。</p> <p>②、③；研究はほとんど進まなかった。</p> <p>2. 著書・論文・学会発表等</p> <p>なし (生活経済学会関東部会での討論者の役割は果たした)</p> <p>3. 主な経費</p> <p>文献レビュー用の書籍など。</p> <p>4. その他の特筆すべき事項 (表彰、研究資金の受入状況等)</p> <p>生活経済学会の企画担当理事となった。</p> <p style="text-align: right;">(本文は1ページ以内にまとめること)</p>			